

---

**黒魔術師松本沙耶香**      **銀怪篇**

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

黒魔術師松本沙耶香 銀怪篇

### 【Nコード】

N3445B

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

さる芸能事務所に仕事を依頼された松本沙耶香。今度の仕事はアイドル達を誘惑する二人組のユニットへの対処であった。彼女達は何者か、そして沙耶香はどのようにして事件を解決していくのか。今回も沙耶香は美女に美少女を次々に籠絡しつつ魔術を魅せます。

## 第一章

黒魔術師松本沙耶香 銀怪篇

東京渋谷。若者達の集うこの街に一人の場違いな女がいた。

黒い髪を上で束ねそのブラックルビーを思わせる切れ長の二重の目をたたえた顔は雪の様に白い。唇は紅でまるで血を塗ったようである。鼻も高く整っておりまるで黒百合の様な姿をしている。

その黒百合に似た身体を黒いスーツと赤いタイ、そして白のカッターで包んでいる。彼女の名は松本沙耶香。知る者は知っている影の世界の女である。

彼女は今若者達の喧騒をよそにあるビルに向かっていた。一見普通のビルであり外からは何をしているのかわかりはしないようになってい

「ここね」

沙耶香はそのビルを見上げて言った。低く硬質の声であった。

「このビルで。間違いないようね」

そしてまた呟く。それからビルの中に入る。

そのままビルの中の階段を昇り上へ進んでいく。薄暗い白いビルの中を漆黒の女が昇っていく。そして三階に辿り着くと右の扉の前に来た。

アルミと曇りガラスの扉であった。そこに白地のプラスチックの札に黒い文字でこう書かれていた。

『社長室』

と。沙耶香はその扉を開けその中に入った。

中は普通の執務室であった。落ち着いてあちこちに可愛らしい女の子達の写真やトロフィーが飾られている。普通の執務室とは少し趣きが異なっていた。

「あつ、もう来られたのですか」

執務室の机に座っていた女性が沙耶香が入ったのに気付いた。

「すみません、こちらの用意がまだできていなくて」  
「いえ、いいですよ」

沙耶香はその女性にすっと笑って答えた。

「お気遣いなく」

「いえ、そうはいきません」

女性は見ればブラウンの上着にタイトスカートであった。それなりの地位にいる女性であろうか。顔立ちは整い程よい化粧をしている。年齢は三十代半ばと思われ黒い髪を後ろで一つに束ねている。落ち着いた雰囲気的美女であった。

「まずはお茶でも」

「それでひたら」

沙耶香もそこまで言われては受け取らないわけにはいかなかった。この美女が差し出したお茶をテーブルのソファアで受け取った。

「慎んで」

「有り難うございます」

美女は向かい側の席に座っていた。そして話をはじめた。

「まずはですね」

「ええ」

「私ですが」

「佐久間事務所のオーナーですね」

「はい」

「お名前は佐久間隆美。そうでしたね」

「はい、その通りです」

その美女佐久間隆美は沙耶香の言葉に頷いた。

「貴女のことは事前にお知らせ頂いていたので」

「御存知でしたか」

「しかし」

沙耶香はティーカップを手に取りながら言う。白い品のいいカップの中には紅の茶があり、そこからはほのかな香りと温かい湯気が漂っていた。

「業界でも一二を争う大手の佐久間事務所が私に声をかけるとは。何があつたのですか」

「どうしても内密で調べて処理して頂きたいお話がありまして」  
隆美は沙耶香を見て言う。

「内密に？」

「はい、貴女でなければ出来ない仕事かも知れませんので」  
「私が」

沙耶香はそれを聞いて目を細めさせた。その切れ長の目がさらに細まる。

「貴女のこともお聞きしています」

隆美はまた言った。

「この東京でもっとも腕の立つ魔術師だとも」

「人はそう言うようですね」

「ですから。貴女をお呼びしたのです」

「それは貴女の為ですか。それとも」

沙耶香はそんな隆美に問う。

「貴女の事務所が持つておられるタレントの為でしょうか」

「タレントの為です」

隆美の答えはそれであつた。

「我が事務所の大切なタレント達です。彼女達に何かがあれば」

隆美はそれだけを危惧していたのだ。それは事務所の社長としてよりも彼女達を預かる者としての義務、そして彼女達への思いやりが感じられる言葉であつた。

「取り返しのつかないことになります。ですから」

「私の力を借りたいと」

「はい」

そして毅然として頷いた。

「宜しいでしょうか」

「私には一つの主義がありました」

沙耶香は悠然とした物腰で述べる。それは優雅と言うよりは退廃

と情欲を感じさせるものであった。相手が女性であっても。

「呼ばれた仕事は必ず引き受けるという」

「それでは」

「はい」

沙耶香も頷き返した。

「この仕事、引き受けさせてもらいます」

「有り難うございます」

隆美はそれを受けてまずは微笑みを浮かべた。

「そのうえでお聞きします」

「はい」

話は本題に入った。沙耶香がいささか強引に進めさせたのである。

## 第二章

「一体何が起きているのですか」

沙耶香は問う。

「薬ですか？それとも」

芸能界に付き物と言われているのがドラッグとセックスである。

「真実はわからない。現にこの渋谷でも噂がよくある。だが隆美はここで奇妙なことを口にした。」

「セックスの方です」

「悪い男ですか。誰ですか？」

ふと自分のことも思い出して言う沙耶香であった。

「それとも。女ですか」

「女です」

隆美は考える目で述べた。

「同性愛者ですか」

「実はこの業界にも多くて」

「そうでしょうね」

これは沙耶香にとっては実に納得のいくことであった。彼女ならではある。

「女が女を愛することは自然ですから」

「自然ですか」

「そちらはわかりませんか？」

「男同士ですとよく聞きます」

隆美はそう答えた。

「誰かと誰かは付き合っているとか。うちは薬も男も厳しくしているのでそうしたことはないと思っていましたけれど」

「女には頭が回らなかったのですね」

「ええ」

そのうえで答える。

「まさかと思いました」

「そんなに理解できませんか」

「正直嘘のようです」

隆美は狐につままれたような顔になっていた。

「女同士は」

「男同士は何となくわかってる」

「あの、女が女をというのは」

隆美は眉を顰めさせていた。嫌悪さえ感じられる。

「やっぱり。不自然ですよね」

「どうでしょうか」

しかし沙耶香はその言葉に何故か笑みを返した。

「そうともばかりは言い切れないかと」

「どうということですか？」

「同じということなのですよ」

「同じ!？」

「はい」

沙耶香のその漆黒の瞳が妖しく光った。目の奥の光だけで笑っていた。

「男を愛するのも女を愛するのもまた」

「はあ」

言われてもやはり実感が沸かない。

「貴女は御主人がおられましたね」

「え、ええ」

隆美はそれに答えた。これは本当のことで彼女の夫はある有名な俳優である。夫との間に娘が一人いる。性のことにも人並みに知識はあるのだ。

「けれどそれが何か」

「おわかりにならないですか。女同士で肌を重ね合わせるのもまたよいことなのですよ」

そこまで言うとき沙耶香はカップを置いた。そして姿を消す。

「えっ!？」

突如として姿を消した沙耶香に驚きの声をあげる。だが次の瞬間「ここです」

前から声がした。すると自分の顔の側に沙耶香の顔があった。

「えっ!？」

「女同士がおわかりになられないのですよね」

至近で隆美の目を見据えて問う。

「どの様なものか」

「だって私は」

「ですからそれを教えて差し上げましょう」

沙耶香は言う。

「今からね」

「今から……」

「怖れることはないのです」

まるで頭の中に直接語り掛けているようであった。不思議な言葉であった。

「全てを委ねられるのです。そうすれば」

「しかし私は」

拒もうとする。彼女はその為に世の摂理を出した。

「主人と。それに子供が」

「それは相手が男の場合でしょう」

だがそれはこの場合は通じなかった。元より影の世界にいる沙耶香には表の世界の摂理など通じる筈もないのであるが。

「ですが女ならば」

「女ならば」

「裏切りにはならないのですよ。何故なら貴女は御主人以外の異性に肌を許すわけではない」

「同性に」

「はい、同じ女に」

そう囁く。

「さあ、ですから」

さらに囁く。

「委ねるのです。新たな快樂に」

「新たな快樂に」

「今から」

唇を奪い舌を吸う。それからソファーにゆっくりと押し倒し服を脱がしていく。自分の服も。二人はそのまま女同士だけが知ることの出来る世界へと入って行ったのであった。

### 第三章

「如何ですか？」

情事が終わった後で沙耶香は隆美に問うた。ネクタイは外しその胸がカッターからはだけているが服は一応は着ていた。その手には煙草がある。

「女同士の味は」

「今までこんなことは知りもしませんでした」

隆美は沙耶香の横で服を整えていた。その頬がほんのりと紅に染まっている。

「けれどこれは……」

「よいものでしょう？」

沙耶香は彼女にまた問うた。

「女同士もまた」

「主人や子供は裏切っていないのですね」

「何故裏切りになるのでしょうか」

その手に煙草の煙をくゆらせながら言う。

「貴女は女と寝た。男と寝たわけではないのに」

「男でなければいいのですか」

「そうなのですよ。男もまたいいものですが」

沙耶香は男も知っている。男も女も知っているのだ。

「女同士は。不貞にはならないのですよ」

「詭弁ではないのですか？それは」

だが隆美にはまだ心に引っ掛かるものがあった。

「本来ならば一人の方にのみ身体を委ねる筈なのに」

「では聞きますが男に寝取られて騒ぐ話がありますね」

「ええ」

こんなものは昔から何処にでもある話である。性が逆になった場合もまた然り。それこそ昔から人類の大きな話の一つである。これ

からもそうである。

「ですが自分の女が女と寝て騒ぐ男の話は？」

「聞いたことがあります」

隆美は答えた。

「そうですね。では自分の夫が男と寝て怒る妻の話は？」

「それもありません」

普通はないものだ。かつての日本やギリシア等では同性愛は普通であったがそれでもこうした話はない。これは夫婦の営みとはまた別の世界の話であるからだ。

「そういうことですよ。それに」

「それに？」

「貴女も目覚めたのではないですか？」

「えっ」

「そう言われてギョツとする。」

「この快楽に。その証拠に」

「それは……」

「素敵でしたよ」

隆美に顔を向けて妖しく笑った。

「楽しませて頂きました。そして貴女も楽しんでおられましたね」

「……」

「ですがこれでおわかりになられた筈です。貴女もまた女の肌の悦びを知った」

「……はい」

「ではおわかりですね。彼女達がどうして女に溺れるのか」

「ええ」

「ではお話を伺いしましょう。詳しいお話をね」

「わかりました」

隆美はそのうえで沙耶香に話しはじめた。一体何が起きているのかを。話を聞いた沙耶香はその夜緑のステンドグラスがカウンタにあるバーで飲んでいた。飲みながらそこで隆美から受け取った

写真を見ていた。

「おや、珍しいね」

カウンターに座る沙耶香にバーテンが声をかけてきた。声をかけながらファースト「ラブ」ジュレップを出した。青いカクテルでウオッカとカルピスにミントの葉を浮かせている。

「アイドルの写真なんて。どうしたんだい？」

「今付き合ってる娘に頼まれてね」

沙耶香はうつすらと笑ってバーテンに応える。

「写真を見ているのよ」

「へえ、お姉さんが頂こうと思ってるんじゃない？」

「それもいいわね」

それは否定しない。

「けれど。やっぱり皆可愛いわね」

「ああ、皆佐久間事務所の娘だよね」

「ええ」

それに答える。

「よくわかったわね」

「その娘は皆可愛いからね。嫌でも目立つさ」

バーテンはにこりと笑ってこう述べた。

「最近テレビでもよく見るしね」

「そうなの」

「テレビは観ないのかい？」

「そういえば観ないわね」

言われて自分でもそれに気付く。

「何故かしら」

「こうして飲んでいるかいつも誰かと二人きりだからなんじゃないかい？」

「ふふふ」

その言葉には含み笑いを返す。

「そうかもね」

「羨ましいねえ、もてる人は」

「男でも女でも」

「私は女の子専門ですけどね」

バーテンも軽い調子でそれに返す。

## 第四章

「それでも羨ましいですよ」

「それでこの娘達だけれど」

「ええ」

バーテンに今持っているアイドル達の写真を見せる。

「悪い評判はないみたいね」

「その事務所は社長さんがしつかりしてるからね」

「そうね」

それは直接会ったので知っていた。

「だからいい娘ばかりだよ」

「そうなの」

「性格もいいんですよ、皆」

「よく知ってるわね」

そこまで聞くと何か妙に思えてくる。

「何でそこまで知ってるのかしら」

「だって私はこの事務所のアイドルは皆鼻屑ですから」

「そうだったの」

これで納得がいった。沙耶香は頷いた。

「女房にはいい歳して、って言われますがそれでもファンなのは事実ですから」

「アイドルは幾つになっても、ってやつね」

「その通りです。ただね」

「ただ？」

「何か最近やけに皆綺麗になったんですよね」

「いいことじゃないかしら」

「いや、それがね」

バーテンは語る。

「何か女の子から女の艶が出て来たっていうか」

「艶が」

沙耶香はその言葉に眉を微かに動かした。

「はい、そんな感じですね。何かあったんですかね」

「成長したってことじゃないかしら」

バーテンにはそう応えた。

「女の子は成長したら脱皮するものだから」

「さなぎから大人の蝶にですか」

「そういうこと。私みたいだね」

カクテルをここで口にした。

「大人の蝶になるのよ」

「お姉さんはさしずめカラスアゲハってところですかね」

バーテンは沙耶香を見てこう評した。

「いつも黒づくめですから」

「有り難う」

その言葉にはすつと笑って応える。

「それじゃあ次はね」

「はい」

アイドルの話かと思ったがそれは違っていた。

「フローズンをお願いするわ」

「そちらですか」

「ええ、ファースト「ラブ」ジュレップはもう飲んだから」

「早いですね」

見ればその通りであった。さつき手にしたばかりのカクテルはもうなくなってしまうていた。

「相変わらずお強いことで」

「お酒はね。幾らでもいけるのよ」

沙耶香は白い顔のまま応えた。その顔に酔いは見られなかった。

「女の子もね」

「凄いことで。じゃあフローズンですね」

「ええ」

オーダーに応える。

「お願いするわね」

「わかりました。それじゃあ」

バーテンはカクテルを作りはじめた。沙耶香はそれを見ている。そしてまた酒を口にするのであった。その夜はそのまま酒えを友と  
した。

捜査は翌日から早速はじめた。まずはその変わったと言われるアイドルの一人堀江瞳からであった。

小柄で今風の女の子だ。茶色に脱色した髪をショートボブにしている。愛くるしい顔と小柄な身体、そしてその外見通りの明るくて元気なキャラクターが人気である。ダンスも歌もまずまずだ。

「確かに最近の写真は何かが違うわね」

沙耶香はタクシーの中で堀江瞳の写真を見て呟いていた。

「奇麗になったというか」

それとは別のものを感じていた。

「女になっているわね、やっぱり」

それを見抜いていた。隆美からの話を頭の中で反芻しているうちに何となく答えがわかってきた。

「それを考えると」

「あの」

前からタクシーの運転手が声をかけてきた。

## 第五章

「着きましたけれど」

「あら、早いわね」

「まあ慣れた道ですし」

着いたのはテレビ局であった。用があるのはここの楽屋なのである。

「ここ来る人多いんですよ」

「でしょうね」

「貴女も業界の方ですか？」

運転手は尋ねてきた。

「どうもそう見えるのですが」

「見えるのかしら」

「モデルさんではないですよ。顔やスタイルはともかく」

「生憎ね」

その言葉にはずっと笑って返す。

「違うわ」

「やっぱり。じゃあ業界ですね」

「そんな雰囲気かしら」

「ええ、まあ」

この業界は実は裏の世界と関わりも深いのだ。ある国民的歌手の母親が関西の暴力団の親分と話をつけたこともある。また映画撮影では普通に協力して観客が撮影の邪魔をしないようにしていた。今ではかなりなくなっているもその名残りはまだあるものなのだ。時折そうした話が噂に出ることからもそれはわかる。

この運転手は沙耶香にそれを感じていたのだ。だがこれは間違いであった。沙耶香がいるのは裏の世界ではなく夜の世界であるからだ。漆黒、いや濃紫の世界なのである。

「じゃあこれで」

「ええ」

金を払って車を後にする。そのまま自然にテレビ局の中に入る。

「あの」

中に入ると普通の会社の受付であった。ただし受付の女の子は他の会社に比べて幾分奇麗なようにも感じられる。これは容姿を重視するテレビ局故であろうか。

「堀江瞳ちゃんの事務所の関係者だけれど」

「佐久間事務所のですか？」

「そうよ。それで瞳ちゃんに様があるのだけれど」

虚実を入り混ぜた言葉であった。正確に言つと事務所の関係者とは言い難いからだ。捜査を要請されていて話は通じるのであるが。

「何処かしら」

「今は生番組の収録中ですよ」

「お昼なのには？」

「お昼だからですよ」

受付の女の子はここでもこりと笑ってきた。

「あの番組がありますから」

「あの番組？あれのことかしら」

そこで思い出したのはあの歯磨き粉や石鹸を作っている会社がスポンサーの番組である。男前とは言えず小柄であるが妙に人間味があり憎めないタレントが長い間頑張っている番組である。このタレントは病気になった時も口さがないネットの住人達からも早い回復を皆で言われた程である。沙耶香も男性としては好みではないがその性格はかなり気に入っているのである。

「はい、あれです」

受付嬢はにこりと笑って言葉を返してきた。

「今丁度放送時間ですね」

「そうね」

懐から懐中時計を出して見る。見ればそんな時間であった。

「けれどどうしても用件があつてね」

「はい、それでは」

「ええ、場所を教えてくださいませんか」

「身元は証明できますか？」

「私の？」

「はい、そういう規則です」

「事務所の関係者でもね」

「何かと物騒ですので」

タレントが危害を受けるという話はよくある。だからテレビ局としても用心しているのである。これは至極当然のことであった。

「宜しいでしょうか」

「ええ、わかつたわ」

沙耶香はそれに応えて懐から名刺を出してきた。佐久間事務所の社員ということになっている。

「これでいいかしら」

「はい、有り難うございます」

「それじゃあ」

「あの」

受付嬢は去ろうとする沙耶香に声をかけてきた。

「何かしら」

「佐久間事務所のタレントさんでしょうか」

「どうしてそう思うかしら」

沙耶香はその言葉に逆に聞き返した。

「いえ、その」

さっきのタクシーの運転手はある程度年配だから沙耶香にはタレントとは相容れない空気を感じていた。だがまだ若いこの女の子はそれを知る筈もなかったのだ。

## 第六章

「何か。あんまりにもスタイルがいいし。お顔も」

「女優とでもいうかしら、私が」

「それかモデルさんですか？けれど名刺じゃ社員になってますよね」「残念だけれど社員よ」

沙耶香は彼女に向けてすっと笑ってこう述べた。

「そでうですよ、やっぱり」

「けれどそう見えたのね」

「ええ、何か」

見れば顔が少し赤らんでいた。

「そんな感じで」

「女優とかになるのには興味がないのよ」

沙耶香はその笑みのまま答えた。

「私が興味があるのはそれとは別のことだから」

「そうなんですか」

「じゃあ瞳ちゃんの楽屋はそこね」

「はい」

あらためて答えた。

「有り難う。じゃあそれでね」

「ええ」

こうして沙耶香は瞳の楽屋に向かった。楽屋のある階に着くともう番組が終わったのか慌しい様子であった。ふと廊下の終わりを見ればあのタレントが辺りのスタッフにあれこれと声をかけていた。

「皆今日も有り難うね」

丁寧な物腰で若いスタッフにも優しい声をかけている。噂通りの穏やかさであった。

「それで明日もまた」

「はい」

「頑張ろうね」

「それで明日のゲストはですね」

「うん」

何か打ち合わせもしていた。

「それはここだから場所を替えようよ」

「そうですね」

「お疲れ様でした」

ここで沙耶香が探している堀江瞳も出て来た。ピンク色のヒラヒラとした可愛い服を着ている。顔立ちは大人になり、身体もそくなつてきておりそろそろそうした服が似合わなくなつてきている。だがそのギリギリのところでも言われぬ妖しさも醸し出していたのであった。

「瞳ちゃんもお疲れ様」

彼は瞳にも優しい言葉をかけた。

「また今度ね」

「はい、お願いします」

普通ならここで軽く声をかけたりするが彼はそれも無い。タレントとはいつても何処までも小市民的であった。それがそのまま出ていた。

瞳は彼に挨拶をした後で楽屋に入る。沙耶香はそれを何気なく眺めていた。

「これでよしね」

彼女が自分の楽屋に入るとすぐに動いた。白い壁に手を当てる。すると手が壁の中に入って行く。そのまままるで溶けるようにして壁の中に全身を入れていったのである。

瞳は楽屋の中で一息ついていた。ペットボトルのお茶を飲みながら漫画を読んでくつろいでいた。

「瞳ちゃん」

沙耶香は後ろから近付き彼女に声をかけた。

「マネージャー？まだ時間があったんじゃない」

「そうよ、時間があるからここに来たのよ」

沙耶香は彼女にそう返した。瞳が振り返ったそこには悠然とした様子で立つ彼女がいた。

「貴女は……」

「聞きたいことがあるのだけれど」

瞳の問いを遮って逆に彼女から問う。

「貴女は最近誰かと仲がいいそうね」

「誰かって」

「答えて」

沙耶香の目が赤く光った。

「うっ」

その目を見た瞬間瞳の身体が硬直した。そしてその目が虚ろになつていく。

「いい？素直にね」

「はい……」

瞳はマリオネットの様な動きでそれに頷いた。沙耶香はその彼女にゆっくりと近付いていく。

「貴女は。最近女の子と付き合っているそうね」

「はい」

焦点の定まらない目でまた答えた。

「それは誰なのかしら」

また問うてきた。

「よかつたら教えてくれないかしら」

「紀津音ちゃんです」

「紀津音ちゃん!？」

「はい、宮坂紀津音ちゃんです。インディーズの」

「インディーズの」

沙耶香はそれを聞いてその整った眉を顰めさせた。

## 第七章

「あの娘と付き合っています」

「そう。それで何処までいったの？」

沙耶香はさらに問うた。瞳をマインドコントロールし、その深層心理に直接語り掛けているのだ。これで真実を話さない者はいない。

「何処までって」

「素直に答えて」

そこには瞳の心のガードがあつた。だがそれは今取り払った。

「誰にも知られることはないから」

「誰にも……」

「そう、誰にもよ」

瞳を安心させる為に言う。

「だからね。言うて」

「わかりました」

そこまで言われてようやく心のガードが解けた。こくりと頷いた。

「最後までいきました」

「抱いたのね？女の子を」

「いえ、私が抱かれたんです」

「貴女が？」

「はい。それから会う度に」

「そう。どんな気持ち？女同士は」

「私、男の子は知らないんですけど」

一応はそう断ってきた。

「けれど。何か」

「普通じゃないでしょ」

「はい」

その言葉には素直に頷いた。

「夢見たいです。私が紀津音ちゃんに抱かれて」

「そうよね。だから綺麗になったのでしょよね」

「そうなのですか？」

「ええ、そうよ」

今度は沙耶香が答えた。

「貴女のその美しさはね。彼女から貰ったもの」

「紀津音ちゃんに」

「けれど。気をつけなさい」

「どうしてですか？」

瞳はその定まらない目でぼんやりとした声で尋ねる。

「何で。気持ちよくて綺麗になれるのに」

「わかるわ。彼女の名前でね」

「名前です？」

「それは貴女には関係のない話よ」

その通りであった。聞きたいことは全て聞いた。だから沙耶香は

それには答えはしなかったのだ。

「もういいわ」

そのうえで言った。

「貴女のこと相手のこともわかったから」

「それじゃあ」

「ええ、忘れなさい」

優しい声で囁く。

「今起こったことは何もかも。いいわね」

「わかりました」

こくりと頷く。沙耶香はそれを見届けてすうつと姿を消す。瞳が

我に返った時楽屋の中には彼女以外誰もいなかった。

「あれ……!？」

急に目が覚めたような感じに違和感を抱いた。

「私今まで何を」

その間の記憶はなかった。だがそれが沙耶香の魔術であり狙いであった。彼女は姿を消し堀江瞳に関しては終わったのであった。

## 第八章

沙耶香はその夜ホテルに入った。そこで隆美と話をしていた。

「インディーズの歌手なのね」

「はい」

いるのはそのホテルのロイヤルスイート。沙耶香はそのベッドに髪を下ろして半身を起こしていた。下はシーツの中にある。隆美はその横に寝ていた。身体はシーツの中にある。

「事務所との契約はまだですけどその歌唱力には定評があります」

「そうなのね」

「大手の事務所も幾つか声をかけているみたいですよ」

「それがこの宮原紀津音」

「そして千葉理子です」

「理子、ね」

沙耶香はその名前に感じるものがあつた。

「それでその二人は外見はどうなの？」

宙に煙草を出しながら尋ねてきた。

「外見ですか？」

「ええ。綺麗なのかしら」

「そうですね、外見は派手ですけど」

理子はそれに答えた。

「綺麗な方だとは思いますが」

「そう」

「それが何か」

「いえ、別に」

沙耶香はその問いには答えなかった。

ただ。その綺麗さが色々と気になって

「そうなんですか」

「それで二人は他にそちらの女の子との接触はあるのかしら」

「亜美ちゃんが危ないかも」

「亜美ちゃんというと」

沙耶香はその名前を聞いて記憶を辿った。

「確か。清水亜美ちゃんね」

「はい、彼女です」

隆美はその言葉に頷いた。

「彼女と理子ちゃんが度々会っています」

「そうなの。それは危ないわね」

「瞳ちゃんと同じですか？」

「ええ。それで亜美ちゃんは今どうしているの？」

「彼女は大人なので深夜の番組なんかにも出せるんで」

「バラエティ番組のレギュラーが入っていたわよね」

「はい、明日その収録があります」

「わかったわ。じゃあその時に」

沙耶香はそれを聞いて言った。

「彼女から聞いてみるわ」

「お願いします」

「それにしても名前がね」

「名前が？」

「ええ。あからさま過ぎて」

沙耶香は煙草の煙を吐きながら口元にすつと笑みを浮かべた。細い目には赤い光が宿っている。

「笑ってしまうわ」

「あの、うちのタレントは皆本名なんですけれど」

「そっちじゃないわ」

隆美に顔を向けて述べた。

「あちらのことを言っているのよ」

「あの二人ですか」

「見ていて。今回は大きな事件にはなりそうもないから」

「だといいですけど」

だが隆美はそれを聞いてもどうにも不安が残った。

「やっぱりあまり大きくなりそうですとうちの事務所の信頼に」

「その為に私を呼んだのよね」

「その通りです。ですから」

「私は約束は守るわ」

沙耶香は言った。

「それが契約だからね」

「契約、ですか」

「そう。契約は絶対のものだから」

これは沙耶香の世界では絶対のものなのだ。契約があり全てが動き、果たされる世界であるからだ。

「誓うわ」

「それでは」

「それじゃあ今日は」

煙草を消した。まるで煙の様にすうつと宙に消えた。

「今日はまた二人で」

「さつきも言いましたが今日は主人が撮影でいないので」

「お子さんは？」

「家の者がいますので。使用人が」

「そう。じゃあ朝までいいわね」

「はい、お願いします」

「それでは」

ゆっくりと隆美の上に覆い被さってきた。

「紫苑の夜の宴を」

二人は肌を重ね合った。女同士だからこそ知ることのできる喜びを。二人はその夜の間にずつと味わうのであった。朝の日差しが宴の終わりを告げるまで。肌を重ね合った。

## 第九章

翌日はまずはその二人のについて調べていた。CDショップのインディーズのコーナーに行くと早速二人のCDが目に入って来た。

「シルバーデビル、ねえ」

CDに書かれているユニット名を見て呟く。

「名前は何かパンクかヘビメタみたいね。外見も」

赤いロングヘアの目の細い細面の女に染めた金髪をショートにした顔と目が丸っぽい女がそこに映っていた。服は二人共黒だが細面の女はゴスロリで丸い顔の女はパンクであった。それが少しアンバランスな印象を受けた。

「お客さんその二人のファンですか？」

CDを見ていると店員が声をかけてきた。

「最近名前をよく聞くから」

沙耶香はそれに応えて言った。

「どんなグループかと思ってね。二人組だったのね」

「はい、最近急に名前が売れ出したユニットです」

店員はにこやかな笑みを浮かべてそう説明した。

「CDも売れていますよ。メジャーなグループと変わらない位に」

「そうなの」

「ええ、試聴されますか？」

「そうね」

提案されてその気になった。

「それじゃあそうさせてもらおうかしら」

「それでは」

店員はそれを受けてCDをステレオに入れヘッドホンを沙耶香に手渡してきた。

「どうぞ」

「有り難う」

沙耶香はヘッドホンを被って曲を聴きはじめた。曲はジャケットの写真から想像がついたようにパンクであった。

「パンクね」

「他のジャンルの曲も歌いますけれどね」

店員が答えた。

「このCDではパンクなんですよ」

「そうなの。ふん」

歌がはじまった。それに耳をすませる。

「成程ね」

聴いて頷く。歌はうまい。それも二人共。これなら人気が出るのも当然だと思った。

「いい感じね」

「そうですね。だから人気があるんですよ」

「曲はこんなものかしら、と思うけれど歌はいいわね」

「ええ、二人共。作詞は宮原紀津音、作曲は千葉理子ですね。この曲は」

「二人で曲も作っているのね」

「まあ大抵のバンドがそうですね。二人もそれは同じです」

「アイドルとは違うのね」

「ええ。彼女達は少なくともアイドルではないですよ。また違う存在です」

「アーティストって言うのかしら」

「簡単に言えば」

店員はそう答えた。

「そうなりますね。作詞と作曲が入れ替わることもありますし」

「どちらも作詞作曲ができると」

「だからいいって言われています。どちらも才能があって」

「よくそれで喧嘩にならないわね」

「仲は凄くいいみたいですよ」

「そうなの」

「二人が言うには相性がいいからって。そついう話です」

「それは少し意外ね」

「それは何故」

「名前よ」

「名前!？」

店員は沙耶香の言葉に首を傾げさせた。

「どついうことですか?それって」

「わからないかしら」10

「あの、申し訳ありませんが」

「そつ、ならいいわ」

どうやら本当にわからないと見て沙耶香は言葉を引つ込めた。

「御免なさいね」

「いえいえ」

「それにしても歌が安定しているわね」

CDだから編集していると思うがそれでもそつ感じられた。

「二人共高い水準で。これは凄いわ」

「実際にライブで聴くともつといいですよ」

「そつなの」

「それこそ病み付きになります。ステージ衣装も派手ですし」

「何か見てみたくなつたわね」

この言葉には本当に目を細めさせた。仕事のことはともかくとして歌は気に入つたのである。

「一度行つてみたらどうですか?原宿とかでも道でやってますよ」

「そつなの。それじゃあ一度……!？」

「どつしたした!?!今度は」

「いえ、ちよつとね」

音楽の中に何かが聴こえてきたのだ。それは間違つてもノイズなどではなかつた。

「何でもないわ。それでアルバムはあるかしら」

「はい、こちらに」

店員はすぐにCDを出してきた。

「その曲も入っていますよ」

「そう、それじゃあ貰おうかしら」

曲は気に入った。買うことにした。

「わかりました。ではカウンターへ」

「ええ」

ヘッドホンを外してカウンターに向かう。そして二人のCDを買うのであった。

## 第十章

「さて」

店を出てCDを片手に持って呟く。もう一方の手はズボンのポケットの中だ。

「これは後でじっくりと聴いてみるとして」

さっきのことが頭の中に残っていた。

「あれは。間違いないわね」

そこに確実に見つけたのだ。彼女だけがわかることであろうが。

「あの二人、どうやら曲に入れているわね。面白いことをしてくれるわね」

そこからあれこれと考えながら場所を移動していた。とりあえずまだ亜美と会う時間はまだであった。原宿へ向かうことにしたのであった。目当てはもう決まっていた。

あの二人である。事前の調査の為でもある。それでわざわざあまり足を運ばない原宿まで来たのである。

街には若者が溢れ返っている。奇抜と言っていいファッションの女の子も多い。沙耶香は彼女達の間を通り抜けながら路上ライブが行われている場所に向かった。

そこではいつものようにパフォーマーやインディーズのバンドが演奏を行っている。その周りを女の子達が取り囲んで黄色い声を送っていた。

「ここは相変わらずね」

沙耶香ははしゃぐ女の子達を見て呟いた。

「何か。女の子達は変わらないわね」

彼女達を見回しながらシルバーデビルを探す。だが二人はいなかった。

「他の仕事かしら」

そう思った時に女の子達の声が聞こえてきた。

「今日はシルバーデビルはいないのね」

「何でもオフらしいわよ」

「お休みなので」

それを聞いて何故いないのか納得した。

「成程ね。だから」

沙耶香も納得した。

「けれどあの二人オフでも関係ないじゃない」

すぐにこうした言葉が出て来た。

「オフならオフでここにいるじゃない」

「そうだけれど今日はいないみたいよ」

女の子達は沙耶香が聴いているとも知らず話している。

「じゃあ何処かしら」

「それはね」

「ちよつと待つて」

その女の子達に声をかけた。

「あれ、お姉さん」

「誰ですか？」

「ちよつとシルバーデビルについて聞きたいことがあるのよ」

そう女の子達に言った。見れば二人共中々可愛い。少なくとも沙

耶香の趣味の範疇だ。

「シルバーデビルにですか？」

「ええ。よかつたらね」

女の子達の目を覗き込んで言う。

「シルバーデビルについて。色々と教えてくれないかしら」

目を覗き込みながら口元だけで笑う。

「何処か静かな場所だね」

「静かな場所」

「ええ、三人で。いいかしら」

「それは……」

「あら、断るつもりかしら」

無意識のうちに断ろうとするのを察して逃げ道を塞いできた。

「折角お願いしているのに。人のお願いを断るのはやっぱり」

「わかりました」

女の子達はまるで魔術にかかったかの様に頷いた。沙耶香は魔術は仕掛けなかったがその声と目で女の子達を籠絡したのである。

「けれど私達」

「普段は女の人とは」

「いいのよ。知らないわけじゃないのでしょうか？」

「はい」

こくりと頷く。これは事実であった。

「だったら。いいわ」

「いいんですか？それで」

「あまりよく知らないのですけれど」

「知っているのは私」

沙耶香は闇に沈んだかの様な、深い声で囁いた。その囁きには色気までが含まれていた。

「教えてあげるわ。女の子のことも」

「それも」

「ええ、よくね。じゃあ行きましょう」

そのうえで二人を左右に抱いた。

「夢幻の世界へ」

そのままホテルに入った。昼から夜の宴を繰り広げる。その後で。沙耶香は二人の少女と共に湯舟の中にいた。

## 第十一章

大きな浴槽であった。そこで三人で入っている。共に一糸纏わぬ姿で蛇の様に絡み合っている。その中心には沙耶香がいた。自身の長い黒髪はおろし、湯舟の中に浸けている。それで二人の少女を絡めていた。

「どうかしら、本当の女の味が」

「これが女の子の味……」

「そうよ」

一人の唇を吸った後で言う。

「男の子とは。また違うでしょ」

「はい」

「それでね」

沙耶香はもう一人の喉を指で撫で回しながら尋ねてきた。

「貴女達は。何処で女の子を知ったのかしら」

まずはそれから聞くことにした。

「よかつたら教えて」

「ここです」

一人がそれに答えた。

「原宿で？」

「はい、相手はあの二人です」

「私も一緒でした」

もう一人も言った。

「あの二人というと」

「これ内緒なんですけれど」

「内緒なのね」

「秘密にできますか？」

「といつても信じるかどうかかわからないですけど」

「睦言を外で話すのは私の趣味ではないわ」

沙耶香は何か警戒している二人に対して優しい声で語った。

「だから。話して」

「わかりました」

二人はそれを聞いて頷く。頷く間にも沙耶香の指や舌が二人を責めていた。

「その相手は」

「シルバーデビルです」

二人は答えた。

「彼女達が？」

「実はあの二人バイなんですよ」

「それで私達も」

「そうだったの。男の子も女の子もね」

「私達はじめてでしたけれど」

「あの二人凄く上手で。それで」

「女の子を知ったわけね」

「はい」

「けれどその後で凄く疲れたの覚えています」

「女の子とするのってそうなのかって思いましたけれど」

「それは人がした場合にはならないわね」

「人が!？」

「ふふふ、そうよ」

沙耶香は笑って答えた。

「私がしたら。どうかしら」

「疲れはないです」

「けれど何か」

二人はそれを断ったうえで述べた。

「まるで本当じゃないみたいです」

「まるで夢の世界に」

「宴は夢の中で行われるもの」

沙耶香は言った。

「そうではなくては。よくはないでしょう?」

「はい」

二人は沙耶香の愛撫にその身を委ねながら答えた。

「こんなのってはじめです」

「身体が熱くなって浮き上がったみたいになって。男の子でもあの二人でも」

「あの二人は他にも女の子を頂いているのかしら」

「はい、多分」

二人はその質問にも答えた。

「私達だけじゃないと思います」

「男の子も入れて」

「やっぱりね。そうだと思ったわ」

「そうだって」

「いえ、これはこちらの勝手な考えだから最後まででは言わなかった。

「けれどそれでわかったわ。有り難うね」

「いえ」

「お姉さんのお役に立てたら」

「ふふふ、言ってくれるわね」

一人の言葉に目を細めさせる。

「それじゃあまたしてあげようかしら」

「もう一回ですか」

「すよ。それもここでね」

湯舟の中で女の子達をさらに絡め取っていった。まるでその黒髪で絡め取り、餌食としていくように。

## 第十二章

「どうかしら」

「ここで」

「よかつたらそれで」

「言ったわね。じゃあいくわよ」

一人を抱き寄せた。そして。

「さあ貴女も」

「はい」

三人で宴に入った。そのまま二人を溶かすようにして弄んでいく。それが終わりまだ夢から覚めない二人を両手に抱いてホテルから出て来た。服も髪も当然のように整え終えている。

「これが女の人なんですね」

「どうかしら。よかつたかしら」

「また……お会いできます?」

一人がうつとりとした顔で沙耶香の顔を見上げてきた。

「よかつたら」

「私も」

もう一人も言ってきた。

「またお会いしたいです」

「いいですか?」

「困った娘達ね」

沙耶香はそんな二人の言葉を聞いて笑った。困った苦笑いではなく悠然とした妖しい笑みであった。

「それじゃあ。時々会いたいわ」

「はい」

「宜しければ」

「その時にまた色々教えてあげるわ」

二人の顔を見て言う。

「色々だね。それでいいわね」

「ええ」

「またお会いしてそれで」

「それからは今度ね」

そこから先は言わずにこう言った。

「携帯の番号はもう覚えたから、二人共ね」

「じゃあ原宿でまた」

「もっといい場所を教えてあげてもいいわよ」

「もっと、ですか」

「それもね。後々でゆつくりとね」

「はい……」

二人は完全に沙耶香のものとなってしまっていた。その身体に少女達の残り香を濃厚に残したまま彼女は次の場所に向かった。向かうのは清水亜美の場所であった。

収録前の休憩時間であった。亜美はその合間を利用して楽屋で一人食事を摂っていた。簡単なサンドイッチである。

茶色の髪をショートにした長身の女の子であった。スタイルはかなりいい。そのスタイルをラフなシャツとジーンズで包んでいる。それがまたスタイルを際立たせる格好であった。

沙耶香はその彼女の横に座った。だが亜美はそれに気付かず相変わらずサンドイッチを食べている。

サンドイッチは野菜サンドとツナサンドであった。肉等は入っていない。側に置かれているペットボトルのジュースもまた無糖のものであった。スタイルを気遣ってであろうか。

「ねえ」

沙耶香はその亜美に声をかけてきた。ごく自然に。

「貴女、付き合ってるそうね」

「！？誰、あんた」

ここでようやく沙耶香に気付いた。顔を向けた時だった。

沙耶香は彼女の唇を奪った。口の中に舌を入れ亜美の舌と絡み合

わせる。一瞬だが確実に彼女の唇を奪った。

## 第十三章

口を離した時彼女は放心状態になっていた。堀江瞳の時と同じであつた。

「まずはこれでよしね」

虚ろな目になつてゐる亜美を見て言った。

「後は聞いていください。清水亜美さん」

「あ、ああ」

瞳の時と同じであつた。亜美は虚ろな目と心のまま答える。

「貴女は。千葉理子さんを知つてるわね」

「知つてるも何も」

亜美はそれに答えて言った。

「あたしのツレだよ」

「そう、お友達なの」

「いい奴だよ。何かと相談に乗つてくれて」

虚ろなままだつたがその目を細めてきた。

「年下だけどさ。あたしをリードしてくれている感じなんだ」

「頼りになるのね」

「ああ」

その質問にも答える。

「他にもあるけれどな」

「他にも」

「ええとな」

亜美は少し言葉を詰まらせた。

「何て言えばいいかな。あたし」

「安心して」

戸惑いを見せる亜美に対して言った。

「ここには私しかないから」

「そうか。それじゃあ」

「よかつたら話して」

沙耶香は優しい声で言う。

「貴女と彼女は恋人同士なのね」

「あのさ、あたしだって結構そついう経験あるんだ」

亜美は素直に告白した。

「この歳だから。男もあるしまあ女も」

「そつなの」

「その中でもあいつはさ。特別なんだよ。何か抱かれてるって感じ  
で」

「抱かれてるのね」

「そつなんだよ。あいつに抱かれてそれで気持ちよくなって」

「そついえば最近貴女は奇麗になつたつて言われてるわね」

沙耶香はここで彼女にまた言った。

「それはどうしてなのかつて言われているけれど」

「あいつに抱かれてるせいかな」

「抱かれていますからなのね、彼女に」

「自分でもそつ思うんだよ。だからさ」

「成程ね」

それを聞いて頷く。

「じゃあ彼女とは離れたくはないのね」

「ああ。あいつがその、色んな女や男とあるのは知ってるよ」

それを知つたうえで付き合っているのである。変わった関係と言  
えば変わった関係だが何処かただれたものも感じさせるものである。

「けれどそれでもさ」

「離れたくはないのね」

「そついうこと。こんなこと言うのつて変かな」

「いえ、そつは思わないわ」

沙耶香はそんな彼女の言葉を肯定してみせた。それは彼女も同じ  
なのである。

「私もそれは同じだし」

「あつ、そうか」

「もつとも私は。抱く方だけれどね」  
目を細めてこう述べる。

「できたら貴女も……. . . . .といきたいのだけれど」  
「ま、まあそれは今度で」

虚ろな目だがどうにも言葉はかなりはつきりしている。本音がそのままだけで出ているからであろうか。

「あんたが誰かはわからないけれどまたな」

「わかったわ。じゃあまた」

「ああ。まだ話すことはあるかい？」

「まだ一つあるわ」

「そうか。それは何だい？」

「疲れないのかしら」

沙耶香は問うてきた。

「疲れないのかって？」

「彼女とした後で。疲れないのかしら。どうなの、それは」

「そういえば結構疲れるかな」

亜美はその質問にも答えた。

「何かな。普通のよりずっと」

「そうなの」

それを聞いてやはり、と思ったが言葉には出すことはなかった。

「けれどそれがどうしたんだい？」

「いえ、何でもないわ。じゃあ質問はこれでおしまい」

「そうなのか」

「今の話は忘れなさい。いいわね」

「あ、ああ」

「貴女とはそのうち会うことになるかも知れないし」

立ち上がりながら言う。

「その時にまた。楽しみましょう」

「そうか。じゃあな」

「ええ、また」

かなりはつきりとした話は終わった。これで理子に対する証拠も揃んだ。紀津音と理子に対する話はこれで二つ揃った。沙耶香はこの二つを手に入れてから次の動きへと移るのであった。

亜美の楽屋を出た時にはもう夜になっていた。沙耶香は銀座のバーで一人飲んでいた。

今日もまたカクテルであった。今飲んでいるのはコーヒーカクテル。文字通りコーヒーを使ったカクテルである。いつもの様にカウンターに座って飲んでいた。

## 第十四章

後ろから聴こえるのはジャズではなくムード歌謡曲である。バラード調の曲が洒落た現代風の雰囲気の店によく合っていた。その中で一人自分と同じ色のカクテルを口にするのであった。

「ねえお姉さん」

曲と酒に浸る彼女の横から声がした。

「聞きたいことがあるのだけれど」

「あら、自分から来たのね」

沙耶香は声が出た方を振り向くことなくこう呟いた。

「明日にでも私の方から行こうと思っていたのに」

「何か色々感じたから」

「それで自分達から来てあげたのよ」

声は一人ではなかった。もう一人、合わせて二人であった。

「まさかお姉さんだったとはね」

「少し驚きよ。普通の人だと思ったのに」

「普通の人だったらどうしたのかしら」

沙耶香は相変わらず振り向くことなく声に尋ねる。

「別に」

二人はその問いには特に敵意も悪意も見せては来なかった。

「何もしないわよ」

「命をどうとかったのはあたし達の流儀じゃないの」

「そうなの」

「それはわかっているとと思ってたけど、お姉さんなら」

「そうじゃなくて？」

「そうね」

沙耶香は口元と目元を微かに歪めて笑った。

「それは否定しないわ」

「やっぱり」

「じゃああたし達の言いたいことはわかるわね」  
「ええ」

それを聞いたうえでこくりと頷いた。

「時間は何時がいいかしら」

そして二人に問うた。

「明日ね。夜でしょ」

「ええ、じゃ明日の夜」

「場所はね」

「私は何処でもいいわよ」

沙耶香はそこは二人に任せた。

「何処でもね。さあ、何処かしら」

「そうね、渋谷はどうかしら」

「渋谷に」

「場所は道玄坂」

一人が言った。

「そこならあたし達にぴったりでしょ」

「ふふふ、面白い場所を選ぶのね」

「あら、ぴったりじゃないの？」

声のうちの一人が言う。

「あたし達には」

「じゃあ明日の夜道玄坂ね」

もう一人が言った。

「待つてるから」

「それじゃあね」

「ええ、楽しみにしてるわ」

コーヒーカクテルを飲み干しながら答えた。

「ただ。今日はどうするの？」

沙耶香は空になったグラスを手に持ちながら二人に尋ねた。

「このまま帰るのかしら。まだ夜は長いのに」

「楽しみは明日よ」

二人は沙耶香にそう答えた。

「焦らないのは貴女の流儀じゃないのかしら」

「だからあたし達も合わせているのに」

「そうね。そう言われればそうね」

沙耶香自身もそれに頷いた。

「それじゃあ今日は一人で楽しむとするわ」

そしてこう言った。

「残念だけれどね」

「まあ焦らないことね」

声達は楽しそうに言う。

「明日は本当に楽しくなるから」

「舞台は渋谷道玄坂」

「とっておきのステージを用意しておくわ」

「ええ、期待しているわよ」

次のカクテルを手に取りながらそれに答える。今度もまたコーヒ

ーカクテルであった。

「それじゃあね」

「ええ、明日の夜」

「また会いましょうね」

声は消えていった。沙耶香は一人に戻った。一人に戻るとかえっ

て寂しさが増すものである。

「さて、と」

またカクテルを飲んでから顔を少し上げた。

「今夜は女の子も男の子も側にいないわね。いるのはお酒だけ」

空になったカクテルのグラスを見下ろして呟く。その底にはコー

ヒーの黒が僅かに残って漂っていた。

「じゃあ。それに溺れるとするわ。この夜は」

そしてまた夜の色をした美酒を飲む。この日はコーヒーの味がする酒を楽しんだ。それに全てを委ねるかの様に親しんだ。次の日の宴のことを想いながら。

次の日は遅くはじまった。幕を開けたのは夜になってからだった。

## 第十五章

沙耶香は一人渋谷の道玄坂を歩いていた。この街は夜であっても人通りが絶えない。

男女のカップルもいれば遊び人の男もいる。派手な身なりと化粧の女もいる。その顔触れはまちまちであったがいずれも遊興と香水、そして化粧の香りを濃く漂わせていた。

その中を沙耶香は進む。退廃と魔性の香りをその身に漂わせながら。漆黒の、夜の闇の中に溶け込んでしまいそうな服と髪をそのままに坂を登っていく。

坂を登りつめた。すると周りには誰もいなかった。

「ようこそ、ステージへ」

「待っていたわよ」

前には道がある。その向こうには黄色い、巨大な満月が見えている。漆黒の空をそれで青く照らしていた。

その月の中に二つの影が現われた。まるで沙耶香に自身の姿を見せるように。

「シルバーデビルね」

「ええ」

二つの影は沙耶香の言葉に答えた。

「宮原紀津音よ」

まずは紀津音が現われた。

「千葉理子よ」

続いて理子が。CDのジャケットで見たのと同じ顔であった。

だが服装は違っていた。紀津音は青いジーンズに草色のシャツ、スニーカー、理子はミニのキャミソールという格好であった。理子の靴はサンダルであった。

「名前はもう知っているわね」

「ええ。何をしているのかも知っているわ」

「沙耶香はそれに答えた。」

「もてるそうね」

「否定はしないわ」

「それに紀津音が答えた。」

「それが私の糧になっているのだし」

「何が望みかしら」

「沙耶香の声が鋭くなった。」

「何がって？」

「人の精を吸い取るのは。何が望みなのか？」

「別に深い意味はないわ」

「今度は理子が答えた。」

「深い意味はないとは？」

「だって。あの娘達は楽しんでるでしょ」

「理子は軽い調子で答えた。」

「私達と交わって」

「それで私達はあの娘達に奇麗を与えているのよ」

「奇麗をね」

「ええ。少し精を貰うだけでね。別に命に関わるようなことはしてないわよ」

「紀津音は言う。」

「また言うけれど私達の流儀じゃないし」

「それに人を殺したら私達の恋人がいなくなるから」

「恋人、ねえ」

「奇麗にしてあげるかわりにちょっと精を貰う」

「疲れるだけよ。何か悪いかしら」

「それ自体は悪くはないわ」

「沙耶香もそれには特に否定的なものは見せはしなかった。」

「けれどね」

「けれどね。何？」

「こちら仕事なのよ。このことは依頼主に報告させてもらうわ」

「私達の正体を？」

「そうよ。悪いけれどね」

「生憎こちらこそうされると困るわ」

理子がすつと前に出て来た。

「私達はまだまだ男の子も女の子も食べたいし」

「それに芸能界っていうのが気に入ってきたし。いいところじゃない」

「華やかだから？」

「それもあるわ」

だがそれだけではないのは沙耶香もわかっている。

「その裏にある爛熟と退廃も」

「まるで腐りかけの果物みたいに。美味しいから」

「腐りかけの果物、ね」

実は沙耶香もそれは嫌いではない。彼女は爛熟した果物を食べるのが好きなのだから。葡萄も梨も無花果も。そして女の子も。彼女は食していくのである。

「言いて妙ね。あの世界はね」

「この街自体がそうだけれど」

「この爛熟と腐敗。まだまだ食べていたいよ」

「ではその邪魔になるのなら」

「悪いけれどそうはさせないわ」

今度は紀津音が前に出て来た。

「若し依頼主に言うのなら」

「私達だって考えがあるわ」

「交渉決裂ね」

沙耶香はその言葉を受けて右手に何かを出して顔の前で構えた。それは一輪の花であった。

## 第十六章

「花……！！？」

「そう、花よ」

二人に対して答える。

「さあ舞え、黒い蘭」

その花は蘭であった。紅でも白でもなく漆黒の蘭であった。それを手に一輪。素早い動きで放ってきた。

すると花が散った。散った花の花びらは辺りに舞う。それは五つや六つではなく数え切れない程であり瞬く間に沙耶香の周りを覆った。

「その蘭で一体何をするつもりかしら」

「黒い蘭は甘い毒」

妖艶に笑ってそれに答える。

「来ればわかるわ」

「生憎私達は人とは違うのよ」

紀津音の影に異変が起こっていた。

ふさふさとした尻尾が生え、耳が狐のものになっていく。それが影にも反映されていた。

口にも牙がある。見れば理子も同じであった。

「だから。お花じゃ私達は倒せないわよ」

「紀津音」

理子が相棒に声をかけた。

「まずはあれを」

「ええ、わかったわ理子」

紀津音はそれを受けて術を出してきた。青い炎の玉が数個彼女の周りに現われる。それは身体にも纏っていた。

「狐火ね」

沙耶香はそれを見て言った。

「使えるとは思っていたけれど」

「そうよ、これが狐の力」

その火を生き物の様に操りながら沙耶香に答える。

「これで蘭も何もかも焼き払ってあげる」

「そして私は」

その横では理子が笑っていた。爪が伸びようとしていた。

見ればその爪もまた人のものではなかった。獣のものである。

「この爪で貴女を」

「心配することはないわ。殺したりはしないから」

「何度も言っけれど私達はそれは嫌いなものよ」

二人はそれは変わらなかった。

「けれどね」

だがそのうえで言う。

「お姉さんみたいな綺麗な人は」

「そう簡単に返すわけにはいかないわ」

「あら、私を頂くつもりかしら」

「そうよ」

二人の狙いは沙耶香の命ではなく沙耶香であったのだ。

「丁度ここは道玄坂。場所には困らないわ」

「いい場所を知ってるのよ。だからね」

「そうね。場所なら私も知ってるわ」

沙耶香もここには何度も足を運んでいる。そして女の子を味わっているのである。

「ならそこに。けれどね」

その黒い目が光る。

「それは私が勝った場合よ。もっとも負けるつもりはないけれど」

「あら、私達を抱こっつていうの？」

「人でないのもまた美味だから」

妖しい笑みを浮かべる。異形の者達であろうと美しければそれでよい。沙耶香には少なくとも世間にあるようなモラルは通用しない

のである。

「味あわせてもらっわ」

「面白いわ。じゃあ貴女が勝ったら私達は貴女のもの」  
紀津音が言った。

「そして私達が勝ったら」

今度は理子が言う。

「私が貴女達のものに」

「じゃあ行くわよ」

最初に動いたのは理子であった。

「こちらも容赦はしないから」

「後ろは任せて理子」

「ええ、わかったわ紀津音」

二人は動きを合わせてきた。理子が接近戦を、そして紀津音がフオローを受け持つ。戦術としては完璧な動きであった。

## 第十七章

沙耶香の蘭の庭に飛び込む。すると蘭達が一斉に浮かび上がった。「!?これは」

「これが蘭の甘い毒よ」

沙耶香は理子に纏わりつく蘭の花を面白そうに眺めて答えた。

「言い忘れていたけれどこの蘭は特別なのよ。遅効性の毒があつてね」

「毒……!?まさか」

「そう、そのまさか。死にはしないけれど動けなくなるわよ」

「くっ、そんな花を」

「侮ってもらっては困るわ。私は魔術師なのよ」

口元に涼しげだが凄みのある笑みが浮かんでいた。目も微かに細まっている。

「普通の花を出したりはしないわ」

「うっっ」

慌てて沙耶香の側から離れて欄を手で払い落とす。身体を震わせる様が狸を思わせた。

「理子、大丈夫？」

紀津音が理子のすぐ後ろまで来て声をかける。

「ええ、すぐに逃げたから」

「そう、よかった。けれどこの花は」

「出来る？」

「やってみるわ」

真剣な顔でパートナーに答える。そして今度は彼女が仕掛けた。

「魔性の花でも花は花」

狐火を放ってきた。

「火で燃えないものはないわ」

それで沙耶香の蘭を焼き払おうとする。青い火が瞬く間に夜の闇

の中黄色い月の光を受ける漆黒の花々を燃やしていく。  
それは沙耶香の周りにも及ぶ。すると彼女はその身体を夜の闇の  
中に消えた。

「消えた!？」

「まって、紀津音」

身体を無意識のうちに出そうとする紀津音を理子が止める。

「迂闊に前に出たら駄目よ」

「そうね」

それを言われて動きを止める。その背中に理子が来た。

「隙を見せないで。きつと仕掛けてくるから」

「そうね。どう来るのか」

二人は背中合わせになった。それで死角を消して沙耶香の襲来に  
備えるのであった。

その態勢のまま沙耶香を待つ。すると周りに霧が起こってきた。

「霧!？」

「いえ、何かおかしいわ」

見ればその霧は普通の霧ではなかった。夜の闇そのままの漆黒の  
霧であったのだ。それが今街の中に漂いだしたのである。

「この黒い霧は」

「迂闊に動いたら駄目よ、紀津音」

理子は背中にいる紀津音にこう言った。

「動けば。向こうの思う壺よ」

「そうね」

「ふふふ、そのまま動かないのね」

ここで沙耶香の声がした。だが姿は見えない。

「動かないのならそれでいいわ」

「どういうこと、それ」

彼女の声に紀津音が問う。

「この霧がまさか只の霧とは思ってはいないでしょうね」

「くっ」

「黒は死の色」

沙耶香の声は語る。

「その中で眠るといふのはどうかしら」

「生憎そうはいかないわよ」

紀津音はそれにキツとして言い返す。

「こつちだつてね、伊達に魔力持っているわけじゃないのよ」

「見せてあげるわ、こつちもね」

理子も言う。二人もこのまま待っているだけでは待ちきれなくなっていた。

「行くわよ」

「ええ」

背中合わせのまま頷き合つて飛ぶ。左右にそれぞれ飛ぶ。

建物の壁を蹴つてまた飛ぶ。そのまま交差する。宙に何かを見たからだ。

「やった!?!」

「いえ、これは」

理子が己の爪を見た。そこには血はなかった。

「移し身!?!」

「どうやらそうみたいね」

「生憎ね。それは私ではないわ」

そこにあつたのは只の影であつた。沙耶香の影でしかなかったのだ。

「間違えたのかしら」

「くっ」

「影は一つじゃないわよ」

ここでまた沙耶香は言った。すると今度は複数の影が姿を現わした。

「さあ、今度はどうかしら」

「若しかするとこの中に本当の私がいるかもしれないわよ」

黒い霧の中にさらに濃い黒をした影が複数浮かんでいた。その影

それぞれが言葉を発する。それはまるで沙耶香が数人一度に出て来たようであった。

## 第十八章

「当たれば貴女達の勝ちよ」

「そして私は貴女達のものよ」

沙耶香の声は確かにする。

「どうかしら」

「来ないの？なら私から」

「くっ」

「待つて、理子」

前に出ようとする理子を紀津音が止めた。今度は立場が逆であった。

「多分あれは全部影でしかないわ」

「影なの」

「そうよ。だから仕掛けても無駄」

彼女はそう述べた。

「だから今は」

「そうなの。じゃあどうするの？」

「それは」

どうしていいかまでは紀津音はわからなかった。だがここで理子の頭の中にあることが閃いた。

「そうよ」

そしてすぐに紀津音に対して言った。

「紀津音、火を出して」

「火を」

「影は闇、火は光」

彼女はそう語る。

「それでわかるわ」

「そうね。火は光を出す」

それを聞いてようやく理子が何を言いたいのかわかった。

「それなら」

「そう、そしてこの霧もね」

「消せるわね」

「ええ」

霧は水である。火の熱気で消えてしまふ。それもまた理子の狙いであつたのだ。

「それじゃあ」

紀津音は早速またあの青い狐火を出してきた。そして自身の身体に纏う。

「目くらましにしては中々やるけれどこれで終わりね」

「今度こそ。仕留めてあげるわ」

理子も身体を縮めて攻撃態勢に入る。正体が見えた途端に襲い掛かるつもりであつたのだ。

「受けなさいっ」

紀津音は己の火を辺りに放つた。

「これで私達の勝ちよ」

炎が放たれると忽ちのうちに霧が消えていった。

影に当たると影も消えていく。理子の読み通りであつた。

「最後の一つ、それが貴女」

理子は影達が消えていく中で呟いた。

「その命は今、貰つたわよ」

これは直感でそう見ていた。声は確かにする。ならば沙耶香は間違いないここにいる。それを讀んだうえで攻撃を仕掛けるつもりであつたのだ。

影達はさらに消えていく。遂に最後の一つになった。

「あれね」

狙いを定めた。すぐに攻撃に向かう。

風のように跳びその爪で切り裂く。しかし。切り裂いたのは虚空であつた。

「なっ!？」

「ふふふ、残念だったわね」

また沙耶香の声が出た。今度は上からであった。

「そこには私はいなかったのよ」

「なっ」

「それじゃあ」

「迂闊ね。私はずっと上にいたのよ」

見れば宙に沙耶香が浮いていた。ズボンのポケットに両手を入れて悠然と笑っていた。

「そして貴女達を見ていたのよ」

「くっ、あの声は」

「私の影達はね、話せるのよ」

沙耶香は言う。

「私と同じようにね。だからよ」

「そうだったの」

「だからああして」

「そういうこと。そしてね」

「むっ」

「私はここからでも魔術を使えるのよ。これはわかるわね」  
身構えた二人に対して言った。

「ここからでもね。これで決めるわ」

右手をポケットから出して悠然と顔の前で動かしはじめた。

「受けなさい、私の魔術」

爪が紅に変わった。そこに雷が宿っていく。紅の雷が。

「行きなさい、雷達」

下に手を向ける。まるで剣を突くように。

するとそこからその紅の雷が放たれた。まるで生き物の様に地面に舞い降りる。

雷達は無数に分かれて地面を這う。その動きは二人といえどかわしきれるものではなかった。

「うっ！」

「これは……!!」

「魔力によつて意識を持った雷よ」

沙耶香は言った。

「これをおかわせるのは難しいわよね。貴女達でも」

「まさかこんなものを」

「使えるなんて」

「言った筈よ、私は魔術師」

二人を見下ろして悠然と語る。その下では二人が紅い雷に襲われ次々と傷を負っていた。闇の中に紅い光が無尽に動き回り妖しい光を放っていた。

## 第十九章

「この程度はね」

「まさか」

「私達が」

「貴女達に魔力があるといってもそれは自然のものを積んだものではないわ」

沙耶香は言う。

「それが魔術師の私に勝てる筈もないのはわかることだと思っけれど」

「魔術師の方が」

「それを生業とする私の方が上なのは自明の理」

自信に満ちた声で述べる。

「言うまでもないことだけれど」

「けど」

「私達はまだ」

「まだ諦めないというのね」

そんな二人を見てまた笑った。妖しさがさらに増す。

「それならこれはどうかしら」

「!?!」

左手の親指と人差し指を合わせて音を立てる。すると今度は雨が降りはじめた。青い雨であった。

「雨……」

「雷は水に反応するもの」

沙耶香は述べる。

「わかるわね。これが」

「うう……」

「紀津音、大丈夫!?!」

見れば二人はもうかなりのダメージを受けている。服のあちこち

が破れ怪我也負っていた。

「このままだと」

「理子、貴女こそ」

紀津音は彼女に気遣いを返す。

「立てるの？」

「ええ、まだ」

理子はそれに答える。

「けれどこのままじゃ」

「そんな、私達が」

「さて、勝負ありかしら」

沙耶香はそんな二人を見下ろして言った。

「くっ」

「そのお肌に傷は残らないようにしてあげているけれどももう限界よね」

「うっうっ……」

「安心なさい。約束は守るわ」

そう言うとすぐに右手を横に払った。すると雷と雨が同時に消え去った。

「けれど。わかるわね」

「わかってるわ」

「私達は貴女のもの」

「そうよ。幸いここは道玄坂」

そうしたホテルで有名な場所である。通うのはカップルに風俗の女の子とその客である。こここのホテルは他の場所に比べて内装が洒落ていることで知られている。やはり若者の街である渋谷だからであろうか。

「じゃあいいわね」

「ええ」

「場所は」

「いいホテルを知っているわ。そこで」

沙耶香は降りてきた。その両手に二人をそれぞれ抱えた。

「楽しみましょう。それでいいわね」

「ええ」

「それが約束だから」

二人は頂垂れてそれに答えた。

「私達を好きにしていいわ」

「何をしてもね」

「そんなに諦めることはないわよ」

諦観を見せる二人に対して言う。

「私は何も取って食べようってわけじゃないのだから」

「けれど」

「楽しませてあげるわ」

その目が静かな微笑を浮かべていた。二人を見ての微笑であった。

「貴女達に今まで知らなかった快樂を教えてあげる」

「今まで知らなかった」

「私達が」

「そうよ。さあ、来るのよ」

沙耶香は言う。

「紫苑の宴に」

そのまま二人を宴の場へと連れて行く。そして二人を彼女達が今まで知ることもなかった快樂へと連れて行くのであった。その中には無論沙耶香本人もいた。また夜の宴が行われたのであった。

## 第二十章

二人が沙耶香の手の中に落ちたことで事件は終わった。彼女は全てのことを隆美に話した。二人は最初に会った時と同じく隆美の事務所では話をしていた。

「シルバーデビルの二人でしたか」

「はい、彼女達でした」

沙耶香は隆美にそう話した。

「ですが特に悪意を以って近寄ったわけではありません」

「あくまで身体ですか」

「ええ。そして精のかわりに美貌を」

「成程」

「また薬やそんなことにも手を染めておりません。悪事には関係ありませんでした」

「そうですね。それは何よりです」

「それでですね」

沙耶香はそこまで話したうえで話を変えてきた。

「あの二人はどうしますか？」

「瞳と亜美ですか？」

「いえ、もうあの二人は心配要らないかと」

それは否定した。

「二人といえばシルバーデビルの二人です」

「彼女達ですか」

「づされますか？」

沙耶香はあらためて問う。

「今のところ何処の事務所にも所属していません。ですがあれだけの才能があれば」

「メジャーになるのは間違いなしと」

「それは貴女もおわかりだと思いますが」

「ええ」

むしろそれは沙耶香よりよくわかる。伊達に芸能事務所を持っているわけではない。その眼力は確かなものがあつた。

「ですが」

「何、狐と狸というのは問題になりません」

沙耶香はそう言つて隆美の不安を取り除いてきた。

「この世界にいるのは人間だけではありませんし」

「人間だけでないとは？」

「この東京は魔都」

沙耶香は言つ。

「人以外の存在がいても何の不思議はありません」

「それじゃあ私が普通に擦れ違う街中でも」

「はい、少なからずいるかと」

隆美にそう述べる。

「そうだったのですか」

「意外ですか？」

「意外も何も」

信じられない言葉である。だが沙耶香が嘘を述べていないのはわかる。その妖しい黒い光を放つ目には偽りの色は存在してはいなかったからだ。

「そうだったのですか」

「ですから彼女達がいるのです」

「シルバーデビルの二人が」

「そして人としても私の様な者が」

「貴女もまた」

「表にいる存在ではありません。私の世界は影」

その影の中で浮かび上がる深い笑みをたたえていた。

「表ではありません」

「はあ」

「ですから申し上げるのです」

そしてまた言った。左手を前に出して手の平を裏返した。

「シルバーデビルをこちらで雇つてはと」

「けれど女の子が」

「何、表に出ることはありません」

その心配もまた打ち消した。

「異形の者のことは決して表には出ません」

「表には」

「スキヤンダルもそれを嗅ぎ回るジャーナリズムも所詮は表の世界のこと。影の世界のことではないということなのですよ」

「では」

「はい、問題ありません」

沙耶香は述べた。

「表に出る可能性は」

「わかりました。それでは」

隆美はそこまで聞いて決断を下した。

「あの二人を私の事務所で預からせて頂きます」

「それがよいかと」

「ところで」

「はい」

隆美はその二人に関して沙耶香に聞きたいことがあった。それを聞いてきた。

「あの二人はバイセクシャルですよね」

「ええ、そうですが」

「確か貴女もまた」

「それは御存知だと思えますよ」

沙耶香の目が細くなった。

「少なくとも女の子に関しては何」

「それではやっぱり」

「どうだと思われませんか？」

「貴女が思っておられることと同じです」

「ふふふ、鋭いですね」

「それで楽しまれたのですか？」

「ええ、楽しかったですよ」

話しながら渋谷の夜のことを思い出す。それは実にいいものであった。

「かなりね。今でも身体が覚えています」

「そうですね」

「宜しければ貴女も」

沙耶香もそれに誘う。

「御招待致しますが」

「それまた自分でお伺いしますので。そういうことですか」

「ええ、そうですね。何、狐と狸です」

沙耶香は述べる。

「危険はありません。御安心を」

「でしたらお言葉に甘えまして」

「それではこの話は終わりですね」

「お金はお話したところに振りこまさせて頂きました」

「早いですね」

「お金のことはしっかりとしておかないといけませんので」

流石にそこはしっかりとしていた。

「そうですね。それでは私はこれで」

「あの」

立ち上がり去ろうとする沙耶香を最後に呼び止める。

「何か？」

「今度御会いする時は仕事とは別のことで御会いたいのですが」

「夜にですか？」

「はい、主人がいない夜に。宜しいでしょうか」

「ええ、それでしたらお待ちしておりますよ」

沙耶香の目が紅く妖艶に光った。

「銀座の夜で。場所は」

「バーで。ロゼのワインを頼んで」

「そうすれば私は何時でも現われます。では」

「銀座の夜でまた」

「御会いしましょう」

沙耶香は姿を消した。その後にはシャネルと花の香りが漂っていた。それはあの蘭の香りであった。その香りが何時までも事務所の中、そして隆美の周りに漂っていたのであった。まるで彼女を夜の宴に誘う様に。濃厚な退廃の香りを漂わせていたのであった。

黒魔術師松本沙耶香 銀怪篇 完

2006・10・5

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3445b/>

---

黒魔術師松本沙耶香 銀怪篇

2009年2月16日18時10分発行